

東日本大震災で起きたことに向き合う通年講座「311」『伝える／備える』次世代塾の第13回講座が、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスで2月17

第13回講座

日にあった。テーマは「子どもたちの未来」。被災した児童生徒らの支援にともに継続して携わって

いるNPO法人アスイク代表理事の大橋雄介さん(37)、同子どもグリーンサポートステーション事務局長の相沢治さん(42)の証言と訴えに耳を傾けた。



アスイク代表理事

大橋 雄介さん(37)

悩み抱える子支える

生活困窮世帯を対象にした学習支援活動のほか、フリースクールや子ども食堂を運営している。参加する子どもたちは本年度で計約600人。年々増えており、ボランティアが足りることはない。

震災の約3週間後、避難所で暮らす子どもたちに勉強を教え始めたのが出発点だった。仮設住宅の集会所でも活動を続けるうち、避難先で日中寝ている生徒

遺児の話に耳傾けて

わっていない。貧困などの問題を抱えた子どもたちを子どもグリーンサポートステーション事務局 相沢 治さん(42)

遺児・孤児らの心のケアをしている。仙台で関わっているのは約50世帯。喪失によるグリーフ(悲嘆)か

受講生の声

遊びで理解納得

子どもの津波ごっこや葬式ごっこを大人は止めがちだが、安全が担保されればやらせるべきで、むしろ遊びを通して厳しい現実も理解していくという講義に納得しました。目指す教員になつたら現場で生かします。(大崎市・東北福祉大 2年・20歳)

先回り評価せぬ

大人が子どもの行動の善悪などを先回りして評価せず、そのままを受け止めるという悲嘆ケアの要点に感じ入りました。これは大人も一緒。まずは国民の意見を聞くという今の仕事にも生かしたいと思いました。(仙台市太白区・総務省東北管区行政評価局職員・25歳)

ケア社会全体で

震災以前ははた目には見えにくかった不登校や貧困などの課題が、避難所や仮設住宅で可視化されたという話に衝撃を受けました。要支援者へのケアは、平時から社会全体で取り組む必要があると学びました。(仙台市太白区・尚綱学院大3年・21歳)

つこ」や「蘇生ごっこ」をする子がいる。大人は止めがちだが、安全ならむしろやらせるべきだ。子どもは遊びを通して現実を理解する。

震災で1698人が遺児や孤児になった。祖父母やスポーツ少年団の監督なども考えれば、大切な人を失った子どもは数え切れない。大切なのは一人一人の



震災直後の避難所で子どもたちに勉強を教える「アスイク」学習サポーターの大学生

2011年4月3日、仙台市若林体育館



北瓜 遥さん



佐々木ゆりさん



小笠原みなみさん

メモ 「次世代塾」は河北新報社などが震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指し、本年度始めた年15回の無料講座。次回17日が最終回。連絡先は同社防災・教育室＝メール jisedai@po.kahoku.co.jp

運営する311次世代塾推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚綱学院大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構